

八木風輝

1. 事業実施の目的

博士論文執筆のための調査・研究活動

2. 実施場所

モンゴル国バヤンウルギー県

3. 実施期日 平成 30 年 4 月 23 日 (月) から 8 月 31 日 (金)

4. 成果報告

●事業の概要

本申請では、モンゴル国の最西部に位置するバヤンウルギー県で約 4 か月間、以下の 3 点の調査を行った。バヤンウルギー県は、1940 年に設立され、カザフ人が県人口の 9 割(約 9 万人)を占める県である。調査の大半は、カザフ語で行った。

①カザフ人の音の認識と活用に関する基礎調査

本調査では、カザフ語に用いられる 2 つの「音(*dauys*, *dabys*)」という単語の使用の差異から、カザフ人の音の認識に関して聞き取り調査を行った。聞き取り調査は、町に住むカザフ人(劇場の団員や市場の店員、年金生活者等)と地方に住む牧民ら計 20 人に対して行った。

以上の調査の上で、カザフ人が開催する宴の音と音楽の役割を、複数の宴に参加して調査した。カザフ人の宴は、以下の 3 種類に分類することが可能である。1 つ目は、主に親族内に限る情報交換が目的とする、自宅で約 20 人程度のを招待するものである。2 つ目は、小規模の祝いを目的とした約 100 名ほどの集まりである。3 点目に、結婚式の披露宴などの目的で式場に約 400 人を招待するものである。宴によって目的と規模が異なるため、各規模の宴に複数回参加することで、宴の規模の差異や開催目的の違いによって、音楽や音がどのように利用されているかを調査した。

②地方の文化機関に関する基礎調査

本調査では、バヤンウルギー県内の 1 郡(県の下位単位)を選び、そこでの短期的な滞在と文化センターへの聞き取り調査を通じて、文化機関の活動実態の把握を目指した。前回(2015 年冬)は、アルタイ郡を対象に行ったが、今回はバヤンウルギー県南東部のトルボ郡に滞在

し調査を進めた。本来であれば、他の郡の文化センターに関しても併せて調査しつつ、その結果を比較する予定でいたが、以下の③の調査が予想以上に長引いたため、1郡を予備的に調査するにとどまった。

③地方ラジオ局における音楽アーカイブズへの参与と目録作成

バイエルン州にあるバイエルン州地方公共ラジオ・テレビ局内の音楽アーカイブズ部門「アルタンコル」の活動に参与し、収録音源の内容の精査と、磁気テープから mp3 音源へのデジタル化を行った。そして、デジタル化した音源を整理し目録を製作した。1965年に設立された当ラジオ・テレビ局は、バイエルン州全体の広報を中心とした活動を担っている。参与した音楽アーカイブズ部門は、曲の設立当初から現在までの音楽、約 2200 曲を収集した部門である。報告者は、この音楽アーカイブに参与してデジタル化の補助を行いながら、このアーカイブに収録されている音源を入手した。それと同時に、音楽アーカイブの活動の歴史的事実に関して、バイエルン州公文書館の公文書資料の精査と過去のラジオ制作者らへの聞き取り調査を行った。

●本事業の実施によって得られた成果

本派遣事業によって、以下の 4 点の成果が得られた。

1 点目は、音をカザフ人がどのように捉えているのかを、2つの「音(*dauys, dabys*)」に関する単語の使用の差異から明らかにしたものである。そこでは、*dauys* が主に「中から外に出る音のことを指す」ことで、特定の文脈で用いられるのに対し、*dabys* は、*dauys* に該当しない音を指すことを明らかにした。また、カザフ語の多くの単語に、この2つの「音」を連想させる単語が多いことも判明した。

2 点目は、宴での音と音楽の利用に関して、式場での宴と家での宴での音楽の利用の差異があることを明らかにした。家で行われる宴で顕著であるが、その音楽演奏が会話の切れ目において積極的に推奨される。この推奨を通じて、年上から年下、更にホストからゲストに対して指示がなされることで、「歌を歌わせる」空間が生まれる。これによって、宴における音楽を活用したコミュニケーションの一端が見られた。一方、宴を行う式場においては、大規模であるとともにその音楽も式次第によって進行するため、多少変化はあれど式次第の中で歌が組み込まれている点で、家で行う宴と差異が見られた。

一方で、家と式場の両会場に共通するものとして、宴が行われている空間において音を満たし途切れさせないことを、ホストや司会者が積極的に注意を払っていることが確認できた。ここから、カザフ人における客人へのもてなしとは、食事以外にも音を「満たす」ところに意味があるのではないかとの仮説を得た。

3 点目に、トルゴ郡での聞き取り調査を通じて、現在の郡にある文化センターを基礎として、歌手を中心とした芸能活動を行うカザフ人が多数いることが発覚した。今後は、こうした人物にも焦点を当てていきながら、他の郡の状況を比較する必要がある。

4 点目に、社会主義期におけるモンゴル国のカザフ音楽の演奏に関して、アーカイブに保管された音源と具体的な情報を入手することができた。特にアーカイブへの参与を通して、調査地ラジオ局の職員の信頼を得た上で、アーカイブに収録されている音楽の内容を入手した。これによって、収録音源の内容分析を行う可能性を得た。これまで、社会主義期の音楽は、その多くが公文書やインタビューによる研究手法が中心であったので、本アーカイブの内容の分析は、従来の研究手法に加えて、新たな研究手法を用いることによる研究の進展が考えられる。

これらの成果は、論文として『総研大・文化科学研究』および英語圏の学術雑誌へ発表する予定である。また、学会発表として、11月上旬に開催される国立民族学博物館主催のみんなく若手研究者奨励セミナーと11月下旬に開催される日本モンゴル学会(於神戸大学)、更に3月末開催予定の日本中央アジア学会において、本調査における成果の内容を発表する予定である。学内関係では、2019年1月以降に「比較文化学演習Ⅰ」にて研究成果を発表する。

調査中に行った成果還元として、本調査の内容の一部を、『月間みんなく』に寄稿した他、調査地であるバヤンウルギー県のラジオ放送局によるインタビュー(約10分)が、調査地のラジオ番組にて放送された。

加えて、調査中の演奏活動として、2018年7月11日にバヤンウルギー県で行われた「私はカザフ人」(カザフスタン国営放送主催)というカザフの「伝統音楽」の演奏者発掘を目的としたコンクールの予選にてモンゴル国に伝わるカザフ民謡を2曲演奏した。本コンクールにカザフ人以外の外国の演奏者が出演したことはなく、コンクール予選では審査員特別賞に値する評価を頂き、カザフスタンで行われるコンクール本選への出場権を得た。

●本事業について

本事業によって、博士論文の中心を占める本調査を遂行することが可能となりました。本事業による派遣を許可して頂いた先生方と本事業を行ってくださる専攻の担当者の皆様に感謝するとともに、ここで得た成果を調査地を含む社会に還元できるように努めたいと思います。本当にありがとうございました。